

『イソップ寓話』変容考

— 「驚と蝸牛の事」について(3) —

村 上 勝 也

はじめに

「驚と蝸牛の事」について、16～17世紀における変容を検討してみたい。この時期のヨーロッパにおける「イソップ寓話集」は、主として次の三種に大別できる。ギリシャ語・ラテン語対訳本、ラテン語本、当時の現代語訳本（イタリア語・フランス語など）の三種である。「驚と蝸牛」の一話は殆どの「ギーラ対訳本」では見られない。この話を取り上げている多くのラテン語本の場合も、それらの間では変種というほどの差は殆どない。変容という観点からは、先行する寓話集に対して、ひとつに纏められるものであろう。この点では、むしろヴァーナキュラー訳の中に興味を引くものがあると言える。以下、もう少し詳しく述べてみたい。

ギリシャ語・ラテン語対訳本

この系統の訳本については、今回の考察に直接関係するものではないが、同時代の寓話集として少し触れておきたい。管見できた版は1530, 1534, 1538, 1596, 1610年のそれであるが、最後のものを除いて「驚と蝸牛」の話は全く取り上げられていない。ファエドルスを源流とするこの話が、この系統の諸本に見られないということは、少なくとも邦訳本の直接的原典の対象から外してよいと考える。因みに、最初の三書は単なる出版年次の異なる同一本と言ってよいものである。ページ打ちの間違いまで同じである。1596年本も、挿絵が時々入る点を除けば、前三書とほぼ同じものである。いずれにせよ今回の考察対象の話は含まれていない。他方、1610年本は大部なものであり多少趣を異にする。含まれる話数の多いことや——これは色々な寓話集を網羅したため、同一話が繰り返されるためでもある——編者の注釈が巻末に付されている点などである。例えば「肉をくわえた犬」の話は、それぞれの寓話集の箇所です度出てきた後で、さらにファエドルスとロムルス韻文（アデマル集）のそれらも含まれているので、都合五回目になることになる。ここで留意しておきたいことは、この1610年本においても「驚と蝸牛」の話は、ファエドルス集とロムルス韻文のそれらが含まれるのみで、他の箇所では一切現れないことである。従って、1610年本のような形式のものが仮にもっと早い時期に出版されていたとしても、やはり邦

訳本との原典的關係の可能性は非常に薄いと言える。

ファエドルスの原文(p. 412, Aquila & Cornix 37)はともかく、ロムルス韻文(p. 496, De Aquila & Testudine 14)の、ヴァリエントの異同に關係する箇所のみ以下にあげておく。(因みに、Ph., Rom. とともに挿絵は同じものを使用している)

Pes aquilae, praedo ..., aera scindit.
... praemunit ineptum,
Fers onus, hoc fiet vtile; crede mihi.
... tibi subripit...
... concham frange, cibusque cadet.

Hanc, si celsa cadit, saxea frangit humus.

De se tutus homo, subuersus turbine linguae
Corruit; & foteis ista procella rapit. (教訓)

考察の主旨と最も關係する箇所は教訓部の下線部であるが、ここでは中世仏語訳の一つである *Ysopet I de Paris* (14世紀) に付されたロムルス韻文のヴァリエントと一致することのみ指摘しておきたい。

ラテン語本について

一口にラテン語本といっても、構成上色々なタイプがある。含まれる寓話数は別にしても、単に「ロムルス韻文」をのみを挙げているもの(1545年本)。それに詳しいラテン語による解説文の付加されているもの(1502年本)。「ロムルス散文」とは異なるラテン語散文による寓話集などである。筆者は、狭義の意味では、この最後のタイプを本来のラテン語本と考えているが、このタイプにおいても、いわゆる「イソポ伝」の付いているもの、いないもの。他言語と対訳の形式をとるもの(1602年本)、さらに挿絵や索引の有無などの違いを言えば様々である。ただし共通して言える特徴は「鷲と蝸牛」の話が入っていることである。少なくとも——内容の検討は後で加えるとしても——この話の存在の事実そのものは、先の「ギーラ対訳本」よりも邦訳本との近さを匂わせるものである。

まず、その狭義のラテン語本における、この話を取り上げてみたい。確認できたものを年代順に並べると 1517, 1530, 1534, 1542, 1575, 1602, 1644, 1682年本となる。これらに見られる「鷲と蝸牛」の話のラテン語散文はヴァリエントと呼ばれるほどの違いは殆どない。1542年本を挙げる。

DE AQVILA ET CORNICVLA. 10 (1542)

Aquila nacta cochleam, non ui aut arte quiuit eruere piscem. Accedens cornicula dat consilium. Suadet subuolare, & è sublimi cochleam in saxa praecipitare, sic enim fore ut concha frangatur. Humi manet cornicula, ut praestoletur casum, praecipitat aquila, frangitur testa, subripitur piscis à cornicula, dolet elusa

aquila.

Morale.

Noli quibusuis habere fidem: & consilium, quod ab alijs acceperis, fac inspicias. Multi enim consulti, nō suis consultoribus, sed sibi consulunt.

念のため異同について触れておくと、初期の1517～1575年本までは全く見られないと言
ってよい。せいぜい句読点あるいは u→v などの書記法の違いである。1575年本はMorale
が Adfabulatioとなっている。1602年本の場合、quiuit→poterat、二行目の cochleam
がなく、教訓部も省略されている。1644年本は Morale, saxa→Adfabulatio, saxum となっ
ているが、consulti→consulitは単純ミスか誤植であろう。1682年本の casum→casam も
同様である。いずれにせよ全て大した異同でなく、上にあげたものが「ラテン語本」にお
ける二世紀にわたる定版であったことは間違いない。

本体および教訓部の内容については改めて言うまでもないが、要するに烏の鷺に対する
欺き話であり、教訓としては「何人も信用してはならない。他人から忠告を受ける時はよ
く吟味せよ。多くの忠告者は相談人のためでなく、己の利益のためにそうするのだから。」
というわけである。邦訳のそれと全く異なるものである。逆と言ってもよい。タイトルも
象徴的である。「鷺と蝸牛の事」でなく「鷺と烏」である。少なくとも、この話に関して
は、内容的にはラテン語本が邦訳の原典となったとは考えにくいのである。

1502年本と1545年本について

1545年アントワープ刊の薄手のこの本は、この時期のラテン語本としては珍しく、ロム
ルス韻文（アデマル集）のみの寓話集である。前稿、前々稿においてこの韻文を度々取り
上げ検討してきた関係上、異同箇所のみ下に挙げておきたい。次に1502年本について。こ
れも同様にロムルス韻文集であるが、この場合は韻文の後にラテン語散文による詳しい解
説文が付加されているのである。韻文の行間にも所々語彙説明がついていて、訳者の解釈
を知る上で興味ある一本である。ともあれ出版の時期からみても、後のオーソドックスな
ラテン語本に先行する資料としては面白い存在と考えるので検討してみたい。

(1545年本) De testudine & aquila.

Pes aquilae aera findit.

... cornua longa patent.

... praemunit, ineptum

Pers onus, at fiat vtile, ...

... concha frange cibusque cadet.

Hanc si celsa cadat, saxea franget humus.

De se stultus homo subuersus turbine linguae.

Corruit, & fortes iusta procella rapit.

〕 (教訓)

教訓部の de se stultus は Steinhöwel と *Ysopet de Lyon* のそれに一致する。なお patent (←latent) では意味が逆になるし、concha (主格) はどう考えても文法的におかしい。iusta (←ista) は「烏」の行為を正当化したい気持ちが働いたか。

(1502 年本) (行間の語彙説明も付す)

illius auis diuidit
Pes aquile predo testitudinis aera scindit
testitudinem testa abscondit lata abscondunt
Hanc sua concha tegit. cornua longa latent
hac ammonitione. talis auis auisat insultum
Hoc monitu cornix aquilam premonit ineptum
geris laborem salubre scz cornici
Fero onus hoc fiat vtile crede mihi
fers testa alimentum capit istud
Quod geris in concha cibus est tibi surrit illum
testa alimentum testam. id est contere
Concha cibum. concham frange cibusqz cadet
id est testam potestatibz fruere. id est arte
Ut concham frangas pro viribus vtere sensu
concham summa lapides terra
Hanc (si celsa cadat) saxeā frangit humus
de se ipso. fatuus circúuentus tempestate
De se stultus homo subuersus turbine lingue
cadiť scz homines inquietudo capit.
Corruit. & fortes ista procella rapit.

(教訓)

—— * —— * —— * —— * —— * ——

Hic auctor ponit aliá fabulá. cuius documentum est. ¶ paupes & impotétes sepe faciút subtilitate & calliditate. qđ fortes & potétes viri perficere nequerút. Istud ení ostédit p testudiné & cornicé. Quodá ení tpe aquila secus mare ambulauit piscatónis causa. sed nullo pisce inuento rapuit conchá que testudiné intus habebat. hanc ergo vnguibus rapuit & ad littus deuexit. vt ibi suis vsibz applicaret. sed concha que indurata erat nec vnguibz nec rostro frági potuit. & sic nec vi nec arte testudiné habere potuit. Cornix ergo q̃ aderat vidés aqlam frustra laborare. accessit ppius & dixit aq̃le. si me pmittas tecú habere ptem testudinis móstrabo tibi modú & viá acq̃rendi hanc escá. qđ cuz aquile placuisset ait & cornix. Tu in sublime volare debes. & sic ex alto proijcies concham ad terrá

petrosam & tūc testa fracta cibū accipies. Aquila aut̃ approbat consilium cornicis & in altum volās testudinem ex vnguib⁷ ad terrā proiecit. quā cornix subtus expectans protinus rapuit. & sic aquilam famelicam decepit. Moraliter intelligitur ꝑ homo non debet credere verbis quorumcunq̃. q& sic sepe decipitur. sicut aquila decepta fuit.

この1502年本と先にあげた1542年本の類似性あるいは関連性は、前者の敷衍箇所を別にすれば、かなり明瞭であろう。例えば前半部の「鷺が海のほとりで魚を漁っていて亀を見つけた」などは Marie de France のそれを髣髴させるが —— マリーの場合は「貝」であるが —— こういった部分を除けば、1542年本のそれに非常に近いと言える。この印象を与えるのは特に本体の結末部分と教訓の前半部である。

(1502年本)...quā cornix subtus expectans protinus rapuit. & sic aquilam famericam decepit. Moraliter intelligitur ꝑ homo non debet credere verbis quorumcunq̃...

(1542年本)...Humi manet cornicula, ut praestoletur casum,... subripitur piscis à cornicula, dolet elusa aquila. Noli quibusuis habere fidem...

すなわち、下で待ち受けていて直ちに獲物を失敬し、相手を欺いたことや、いかなる者（の言葉）も信じてはいけないといった部分の言い回しである。

ただし、別の観点から見ると、1542年本ではかなりの簡略化や変更も見られるのである。「亀 (testudo)」が「蝸牛 (cochlea)」となり、「烏」も cornix → corniculaとなっている。さらに、ある意味ではキーワードとも言える「分け前の要求」の部分が削除されている —— これは、他の箇所の簡略化とは少々意味合いの異なるものと考える —— 。最も大きな変更は前置教訓の削除と後置教訓の後半部の言い回しの差であろう。先に後者を取り上げると、1542年本の方が味のある表現に変えていると言えよう。1502年本の方は無味乾燥であり、面白みに欠ける（各々の下線部参照）。

次に、1542年本では全く削除されている前置教訓についてであるが、1502年本のそれには興味ある変容と翻訳上の「残り滓」が見えることを指摘しておきたい。この前置教訓は源流のファエドルスに始まり、「ロムルス散文」、シュタインハーヴェル、スペイン語訳、マジョー、カクストンと維持され、その他の訳本では無視されるか、後置教訓にまわされたものである。その際、マジョーとその重訳であるカクストンでは前置教訓と後置教訓の間で矛盾をきたしていることは前稿で指摘した。他方、スペイン語訳までは、ほぼ原典のファエドルスの原意を継承している。すなわち「何人も権力者に対して十分に防ぎ切れるものでない。さらにもし、この権力者に邪悪な忠告者が加わり、力と卑劣が一緒になって攻めれば、全てのものは滅びる。」である。ここで改めて1502年本のそれを見ると、かなりニュアンスの違うものとなっていることが判る。「貧しく、力のない者も、巧妙さと狡

猾によって、力ある権力者の為しえないことをしばしば為す。」である。すなわち「鷲←→亀」の構図は「鷲←→鳥」のそれに変容しているのである。さらに <subtilitate, calliditate>によって、すでに本体部分や後置教訓の変容を暗示しているとも言えるのである。しかしながら、続く一文 —— いわば前置教訓と本体部分に挟まった一文であるが —— <Istud enim ostendit per testudinem & cornicem> の testudinem は妙である。aquilamの方が自然であろう。もし仮に<subtilitate, calliditate>を肯定的な良い意味、すなわち「英知」と解釈するならば、まだ可能かと思えるが、これは無理であろう。よってこの一文は、原典（ファエドルス以下）の前置教訓の、翻訳過程における「残り滓(ré-sidu)」と考えるわけである。1502年本はすでに「鳥と亀」の話というよりも「鳥と鷲」の欺き話に焦点が移っているからである。ところで、これを仮に良い意味での「英知」と見なせば、邦訳本の教訓にやや似ているとも言えるが、上で述べたように、遠因程度に見る以外はやはり無理であろう。最後に「分け前の要求」部分は、1502年本、邦訳本ともに残っているが、1542年本では削除されていることを改めて指摘しておきたい。

イタリア語訳本について

この時期には多くの、いわゆるヴァーナキュラー訳が出版されているが、そのうちのイタリア語訳について触れておきたい。目にした二本は訳者(Signor Conte Givlio Landi)も同一人物であり、事実、綴り字の異同しか見られず、同一本と見なしてよいものであるが、残念なことに出版年次が分からない。ただし、同じようなイタリア語訳で「イソポ伝」のみを独立させて訳した三本があり(1505, 1533, 1550)、そのうちの一本(1550)が上の二本の訳者と同一人物であることから、16世紀中頃の出版と考えて間違いあるまい。

Dell'Aquila, e la Cornacchia. 115.

L'Aquila haueua trouata vna Tartaruga, nè con ingegno, ò arte alcuna poteua trouar via di romperla. La Cornacchia la consigliò, che volasse in alto, e la gittasse ne i sassi, che la romperia. Prese il consiglio l'Aquila, & volò in alto per mandarla giù: La Cornacchia aspettò in terra, casco la Tartaruga, e si ruppe, e la Cornacchia la rubò. Onde l'Aquila si dolse di essere beffeggiata.

Sentenza della fauola.

La fauola significa, che non douemo dar fede ad ogn'vno.

簡潔にして明瞭であり、敷衍など一切ない。また、1542年のラテン語本のそれと酷似していると言える。ほぼ直訳と言ってもよかろう。敢えて違いを挙げるならば、それぞれにおいて、やや蛇足的と言える箇所が、互いに削除されている。すなわち、イタリア語訳の中ほどの <Prese il consiglio l'Aquila, & volò in alto per mandarla giù> はラテン

語訳にはみられず、逆に、その教訓部の後半 <& consilium, quod ab alijs acceperis, fac inspicias. Multi enim consulti, nō suis consultoribus, sed sibi consulunt.> はイタリア語訳では省略されている。この結果、量的にはほぼ同じ長さの話となり、以上のことと、二つの語彙の違いを除けば、逐語訳とさえも言えるのである。二三の語彙について触れておきたい。微細なことのようなのだが、このような直訳的な雰囲気の中では、翻訳過程におけるキーワードとしては、却って大きな意味を持つと考えるからである。それは一行目の cochleam(蝸牛)とTartaruga(亀)、vi(力)とingeno(才知)の異同である。原典的には testudoとvis である。ただ、イタリア語訳の ingeno は arte との同義語反復であり、この語は妙である。tartaruga については、これまで取り上げたイタリア語系(Zucco, Tuppo) の訳では<testudine> を用いている。なお「鳥」については正にぴたりと一致する(cornicula=cornacchia)。Zucco, Tuppo では cornice<lat. cornix である。

フランス語訳本について

フランス語訳は Steinhöwel を模したとされる Macho(1483)の奔放な翻案については、前稿で触れたが、ここでは1561, 1645, 1693年本を挙げ、その変容を確認しておきたい。

(1561年本) De l'Aigle et de la Corneille .x.

L'Aigle ayant recouuert vne coquille/ ne pouuoit arracher le poisson de dedans/ ne par force ne par engin. La Corneille suruint/ et luy donna conseil de voler/ et quand elle seroit bien haut de laisser choir la coquille sur les pierres/ et par ainsi elle se pourroit rompre. La Corneille demeura à terre pour attendre l'issue. L'Aigle jetta sa proie/ et la coquille se rompit. La Corneille desrobe le poisson: et rien ne demeure à l'Aigle que honte/ mocquerie/ et perte.

Le sens. Ne te fie pas à vn chascun/ et regarde attentiuement au conseil que te donnera autrui. Car plusieurs à qui on demande conseil/ ne songent pas pour le proufit d'autrui: mais pour leur propre commodité.

cochlea(蝸牛)とcoquille(貝)の違いを除けば、このフランス語訳(1561)は、先のイタリア語訳よりも、さらに(1542年ラテン語本のそれに)酷似していると言える。イタリア語訳とラテン語訳の間に見られた僅かの翻訳上の過不足もない。教訓部もぴたりと一致する。敢えて言えば、本体部分最後の僅かな言い回しの差だが(dolet elusa aquila →et rien ne demeure l'Aigle que honte, mocquerie et perte)、これも敷衍と言えるほどのものではない。

なお、ラテン語訳では<cochlea>の「肉身」を<piscis>を用いているが、フランス語訳も同様であり、その言い回しも含めて一致することを指摘しておきたい。要するに、全く

も同様であり、その言い回しも含めて一致することを指摘しておきたい。要するに、全くの逐語訳に近いものであり、これらのヴァーナキュラー訳の原典はラテン語本とみて間違いないものとするのである。次に1645年本を挙げる。

FABLE XI. De L'Aigle, & de la Corneille.

L'Aigle ne pouuant, ny par son industrie, ny par sa force, tirer vn poisson hors d'une coquille qu'il auoit treuuee, la Corneille suruint qui luy conseilla de s'esleuer bien haut en l'air, & de laisser tomber la coquille sur des pierres, disant, que c'estoit le vray moyen de la rompre. Elle cependant demeura en bas pour en attendre l'issuë, qui fut telle, que l'Aigle ayant laissé cheoir sa proye, la coquille se rompit: ce que voyant la Corneille, elle en desroba le poisson, & ainsi la mocquerie & la perte en demurerent à l'Aigle.

MAXIME XI.

Que le conseil est la chose du monde qui se donne à meilleur marché, & qu'on achette le plus cher: & que quoy que la facilité soit ordinaire aux belles ames, il y faut neantmoins renoncer en quelque façon, quand on traite avec des petits compagnons qui n'ont pour but dans toutes leurs actions que leur propre interest.

本体部分に関しては改めて繰り返す必要はあるまい。84年間の時の経過は全くなきが如くに、1561年本の引き写しと言ってもよい。¹⁾ 逆に、教訓部についての表現上の変更、色付けには留意すべきものがある。本体は原典に忠実であるが、教訓において、その言い回しに工夫を加えるといった、後代の訳本における流行を髣髴させるものである。中世においてもこれは見られた。例えば *Marie de France*, *Ysopet de Lyon*, *Ysopet I de Paris* のそれであるが、特にマリーのそれは、雰囲気的に近いものを感じる(*felun que par arguet e par engin mescunseille sun bon veisin*→aux belles ames; avec des petits compagnons)。因みに、少々横道にそれるが、17世紀最後(1699)の刊本である *L'Estrange* のそれも、非常に簡潔で短いものであるが、「隣人」の概念を持ち込んでいる。参考のために挙げておく。

Fab. XII. A Crow and a Muscle.

There was one of Your *Royston-Crows*, that lay Battering upon a *Muscle*, and could not for his Blood break the Shell to come at the Fish. A *Carrion-Crow*, in this *Interim*, comes up, and tells him, that what he could not do by Force, he might do by Stratagem. Take this *Muscle* up in the Air, says the *Crow*, as High as you can carry it, and then let him fall upon that Rock there; His Own Weight, You shall see, shall break him. The *Roystoner* took his Advice, and it succeeded

Ground, and flew away with the Fish.

The Moral.

Charity begins at Home, *they say; and most People are kind to their Neighbours for their Own sakes.*

最後に1693年刊フランス語訳を取り上げる。これは面白い刊本で、問題としている話が二度出てくるのである。先に「ギーラ対訳」の1610年本で触れたように、同一話——例えば「肉をくわえた犬」——が四度五度と繰り返し採録された例はある。しかしそれは、色々な寓話集の大部な集成本として、結果的にそうなったわけである。この1693年刊フランス語訳本の場合は事情が多少異なる。訳者が本来の同一話を別話と見做し、二話に分けた形跡を窺わせるのである。

D'un Aigle, d'une Corneille, et d'une Tortue. (p.66-67)

UN Aigle avoit emporté dans les airs une Tortue, qui se tenoit si fort enfermée dans ses escailles, qu'il lui estoit impossible de l'offenser. Une Corneille qui vid son chagrin, s'offrit de lui donner un moien sur pour en venir à bout s'il vouloit partager sa proie avec elle. L'Aigle en etant convenu, la Corneille lui conseilla de voler le plus haut qu'il pourroit, & de laisser tomber la Tortue sur quelque pointe de rocher; ce qu'il fit, apres quoi il leur fut bien facile de faire curée de ce miserable animal, que les avantages de la nature ne purent garentir contre un si grant effort.

Il est impossible à un miserable de se sauver d'un ennemi puissant & malicieux.

D'un Aigle, et d'une Corneille. (p.348-349)

UN Aigle voulant manger une huitre, ne savoit pas comment faire pour en venir à bout. Une Corneille survint & elle lui conseilla de voler le plus haut qu'il pouroit, & de la laisser tomber. L'Aigle fut assez simple que de la croire. La Corneille qui n'atendoit que celà, & qui estoit demeurée tranquillement en bas, se jetta avec rapidité sur le poisson qu'elle avala; laissant volontiers les escailles à l'Aigle, pour le paier de ses peines, & de sa trop simple credulité.

Il faut se defier des gens, qui ne donnent des conseils, que pour profiter de nos divisions, & pour avoir notre bien.

上の二話を比べてみると、その違いは歴然としている。と同時に、同一話であることも明らかである。前者は源流の Phaedrus に始まり、Romulus(散文)、Steinhöwel、スペイン語訳(1489)に見られる系統であり、後者は Romulus (韻文)、Macho(Caxton)、Tuppo さらに本稿で取り上げたラテン語訳やヴァーナキュラー訳に見られる変種である。前々稿

で論じた中世仏語の諸訳も後者に入るであろう。前稿で述べたように、マシヨール(1483)は、この話の中で——前者と後者の内容上の混同をおこし——前置教訓において矛盾を見せているが、この1693年本では、別個の二話に分けているのである。訳者が異なる二話と意識していたかどうかは、確信はないが、傍証的根拠はある。タイトルを変えていること。挿絵も異なるものを使っていることである。

挿絵と話の内容が食い違うことは、中世、近世においては珍しいことではないが、²⁾この場合面白いのは、一方(前者)には、紛らわしいが全く別の話に普通添えられる絵が付されているのである。その別の話とは(Phaedrusとは違う源流の)Babrius系のものであり、Steinhöwel集にも、Avianus集を通して入っている。『エソピカ』では230番に分類され、B.E.Perryは〈The Turtle takes Lessons from the Eagle〉としている。因みに、この話は邦訳の古活字本にも「亀と鷺の事」として、「鷺と蝸牛の事」とは別に、下巻25に入っており、³⁾17世紀後半の有名なLa Fontaineの寓話集の10巻の2(La Tortue et les deux Canards)もこの系統の話である。一般にヨーロッパあるいは日本における近・現代の訳では、むしろこちらの話の方がよく目にするものであり、これに通常付される挿絵が、1693年本の一方(前者)に付いているということは、訳者が——その話と上のBabrius系の別話と混同しているとまでは言い切れないが——少なくとも、取り上げた二話を異なる話と意識していた傍証的証左となるまいか。なお、ずっと後の寓話集(1894)ではあるが、その中でJacobsは、逆に、これらの別話を一話に融合していることを指摘しておく。⁴⁾

念のため個々の話について留意したい点を述べておく。先に触れたように、前者は原形を忠実に止めていると言ってよい。「分け前の要求」もあり、本体部分の終わり方も同じである。すなわち、二者が分け合って食べたこと(下線 leur)の明示。自然の贈り物である亀の堅い甲羅も役にたたなかったこと。本来の前置教訓がの場合後置されているが、内容はぴたりと一致すること(力ある者と悪智恵者が協力する云々)である。これはまた、訳者がこの話の変容以前のものを下敷きにしたことを裏付けることでもある。

別の一話すなわち変容した方(後者)については、これまで見てきたラテン語本およびヴァーナキュラー本のそれと大略は一致する。むしろ「欺き話」を一層明確にし、味付けをしているとも言える。途中ですでにそれを匂わせて(L'Aigle fut assez simple que de la croire)いることや、本体末尾の言い回しである。「鷺の苦勞と輕信の報償として貝殻のみを残してやった」とは、強烈な皮肉であり、烏の悪巧みもここに極まれり、と言ったところである。因みに、この言い回しは、中世フランスのMarie de Franceのそれを思い出させるが、そこでは烏は「鷺が降りて来て気付かないように、食べた後で穴を小さくして、立ち去った」のであり、まだこの烏の方が可愛げがある。

最後に「登場者」について一言触れておきたい。1693年本の後の方の話、すなわち「烏の欺き話」では本来の「亀」が——そして、この訳本のもう一方の話でもTortueである——huitre(牡蛎)となっている。この変容は二重の意味で象徴的である。ひとつは、

上でも述べたように、訳者が別話と意識し、タイトルにも差をつけた点であり。もうひとつは、〈huitre〉は、ある意味では、意識的に変更した語ではないかと思うことである。少なくとも翻訳過程において、例えば語源的混同のようなものから、無意識に生じたものではないと考える。一方で〈Tortue〉は、タイトルに出て来るのみでなく〈D'un Aigle, d'une Corneille, et d'une Tortue〉、そこでも、本体部でも、大文字で強調されている。他方、変容した方の話では、〈huitre〉はタイトルにも現れず〈D'un Aigle, et d'une Corneille〉、本体部においても小文字が用いられているのである。Aigle, Corneille はいずれにおいても当然大文字で表記され、区別されている。

前稿、前々稿と、繰り返し述べてきたことであるが、この第三の主役は非常に浮動し易い。そしてそこには、この話自体の変容と深い関わりがあるということであった。すなわち「鷺+烏 VS 亀」の構図が「鷺 VS 烏」に変ずることによって、亀は小道具化し、結果的に「堅い殻で覆われたもの」であれば何でもよいことになったと推定したわけである。事実、原典 Phaedrus の「亀 (testudo)」は、後代の訳では、様々な語で現れる。welke (Marie de France), limace/limas (*Ysopet de Lyon*, *Ysopet I de Paris*), schneken (Steinwöl), noix/conche (Machos), nutte (Caxton), caracol (Sp.), cochlea (lat.), coquille (Fr. 1561, 1641), Muscle (l'Estrange) などである。しかしながら、この「役者」がこのように色々と変わるのとは、その役割の変化、換言すれば話の「構図」の変容によるだけでなく、その語自体の意味的、形態的特徴にもよると考えられるのである。

すなわち、両極端の「亀」と「堅果」を別にすれば、「貝」と「蝸牛」は、意味的にも形態的あるいは語源的にも非常に近く、紛らわしく、混同がおきても不思議ではない。⁵⁾これに比べ「牡蠣(huitre)」は、意味的にはともかく、少なくとも、形態的・語源的には混同は起こりそうにない。ある程度意識的に変更した可能性が考えられる所以であり、訳者は、これら二話に関して、その差を少しでも出したのではなかろうか。変容した話の方では、あくまでも「欺き話」であり、初めから「失敬して、独り占めする内容」である。獲物は小道具化し、ちっぽけなものでも構わない。他方、本来の内容を継承する話では、いかに寓話とはいえ、「二者で協力し、分け合って食べる内容」が前提となっている話である。獲物はある程度は量的にも大きくなくては現実味に欠けることになるだろう。⁶⁾

おわりに

この一寓話についての一連の論及は、源流のファエドルス以後の諸訳本を辿ることにより、それぞれの間の変容の裏付けをすることにあるが、もうひとつの目的として、最終的には邦訳本の直接的原典を推定することにもある。これまでに管見できた諸本の中には、邦訳の教訓にぴたりと一致するものはない。せいぜいスペイン語訳のそれが、邦訳のそれに変容する可能性をもっていると言える程度である。これは、換言すれば、邦訳の教訓は訳者自身による改新の可能性が高いということである。直接的原典と言う限りにおいては、

邦訳の教訓にびたりと一致するものはない。せいぜいスペイン語訳のそれが、邦訳のそれに変容する可能性をもっていると言える程度である。これは、換言すれば、邦訳の教訓は訳者自身による改新の可能性が高いということである。直接的原典と言う限りにおいては、邦訳の刊行（16世紀末）以降のヨーロッパにおける刊行本の検討は無意味であるが、上に述べたように、この論及には今ひとつ、源流から現代に至る変容の過程を辿ってみたい目的もあり、同時にまた、時代、地域を越えた「発想の偶然性」にもいささか興味を覚えるからである。その意味では18世紀以降の翻訳の検討が残されているが、これは次稿に譲りたい。また、当然のことではあるが、邦訳本の原典探究に関しては、複数の、できるだけ多くの寓話について巨細な検討が不可欠である。それらの結果のクロスするところに、たとえ永久に現物が見出されなくとも、それに近いものが推定できるかもしれない。紙数も尽きたので、最後に1566年刊ドイツ語訳のラテン語による教訓を挙げて終わりたい。これは非常に美しい一本で、彩色の挿絵と短いラテン語のエピグラムが付され、⁷⁾ 本文はドイツ語である。機会があれば次稿で紹介したい。

AQVILA ET CORNIX.

MAxima consilijs vrbs expugnatur acutis,

Omnia consilium, calliditasque domant.

注

- 1) 1645年本にはページの余白に羅一仏の語彙が書かれている。これらが参考原典と何らかの関わりを持つかも知れないので念のため挙げておく。Aquila=Aigle, Cornix=Corneille, Piscis=Poisson, Cochlea=Coquille, Lapis=Vne Pierre, Frangere=Rompre, Furari=Desrober, Ludibrium=Mocquerie. 少なくとも1542年本には furari, ludibrium は用いられていず、cornix, lapis も cornicula, saxa である。
- 2) 全く違う話の絵が付いていることも時にはあるが、よく見られるのは、話の内容と絵の中身が食い違うことである。版面絵はそれ自体別個に発展し使用されたからである。例えば、カクストンのインキュナブラ本では、鷲は本文では「堅果 (nutte)」を「くちばし」にくわえているが、版面絵では「蝸牛」を「足の爪」で持っている。また「肉をくわえた犬」でも、本文では「橋」を渡っているが、絵の方は「浅瀬」を歩いている。
- 3) 天草本では省かれている。
- 4) <The Tortoise & the Birds>; *The Fables of Aesop, selected, told anew and their history traced by Joseph Jacobs*, p.111, Schocken Books, New York, 1894/1966.
- 5) cochlea<gr. kokhlias; conche(=conque)<lat. concha<gr. kogkhê; coquille<lat. conchylia<gr. kogkhulion<kogkhê. cf. huitre<lat. ostrea=pl. ostreum<gr. ostreon.
- 6) 寓話における現実性との関わりについては前々稿でも触れたが。例えば天草本上巻第4

の区別を考慮に入れるべきものと思っている。

7) 前々稿において、ファエドルス及び邦訳本の教訓の町（城郭）の攻略されるイメージについては、すでに触れた。（吉川守先生御退官記念『言語学論文集』， p. 344-360）

参考資料文献

1502: ロムルス韻文、ラテン語散文による解説文（天理大学図書館蔵）。

1505, 1533, 1550: イタリア語、「イソポ伝」のみ（同上）。

1530, 1534, 1538, 1596, 1610: 希一羅対訳本（同上）。

1517, 1534, 1542, 1575, 1644, 1682: ラテン語本（同上）。

1530: ラテン語本（広島文教女子大学蔵）。

1545: ロムルス韻文のみ（天理大学図書館蔵）。

1602: ラテン語本（村上蔵）。

1566: ドイツ語、ラテン語の短いMaxime付き（天理大学図書館蔵）。

1561, 1693: フランス語（同上）。

1645: フランス語（村上蔵）。

(?): イタリア語、16世紀中頃のもの（天理大学図書館蔵）。

(?): 同上。

今回用いた資料の殆どは天理大学所蔵の貴重書である。二度に渡って快く閲覧させて戴き感謝する次第である。特に宮嶋氏、澤井氏には色々と便宜をはかって戴いた。この場を借りて御礼申しあげる。

平成7年12月31日